



「ずく」と「ものぐさ」

小松 和彦

土佐（高知県）の民俗調査を重ねてきたこともあって、土佐出身の植物学者・牧野富太郎をモデルにした、NHK・朝の連続ドラマ「らんまん」を熱心に見てきた。興味深く思ったのは、物語の前半は土佐の佐川が舞台で、そこに登場する主人公や主人公の祖母、姉などの性格が、土佐人の言うところの「いごつそう」（周囲の人の意見に耳を貸さず、思いのまま行動する頑固な性格の男）と「はちきん」（快活で行動力のある心の強い性格の女）をよく表していたことである。

県民の性格を表現する同様の方言は、各地に見られる。薩摩（鹿児島県）では男は「ぼっけもん」、女は「おこじょ」、日向（宮崎県）では男は「いもがらぼくと」、女は「日向かぼちゃ」といった方言があり、男女の性別ははっきりしないが、津軽の「じよっぱり」、越中や加賀の「いちがいもん」など、いろいろと挙げるができる。

それでは、信州人の性格をよく表す同様の方言があるのだろうか。松本に住んだことがあるが、そのような方言に出会った記憶はない。しかし、信州人それ自体の性格を表すわけではないが、それに準じる方言として、信州人の誰もが知っている「ずく」を挙げる人がいる。「ずく」とは、「精を出してする気力」

根気。やる気」（『長野県方言辞典』）と

いう意味で、例えば、県の観光振興のためのキャッチコピーの一つに「ずく出し！知恵出し！おもてなし」というのがあるように、「ずくを出す」とか「ずくが無い」というふうに使われている。

近年、この言葉を県民性を表す好ましい方言だとする趣きがあるかにもえる。だが、その語が実際に用いられる場面をたびたび見聞きしてきた私には、やるべき仕事を怠けたり、果敢に挑戦しない者への、良く言えば「激励」、悪く言えば「批判」として用いられていることに注意を払うべきかと思う。つまり、目の前にいるのは「ずく無し」なのである。

そのことに気づいた私が想起したのは「物ぐさ太郎」の物語である。信州での太郎は「ものぐさ」（ずく無し）であったが、都の素晴らしさを聞いて都に上って「まめ」に（ずくを出して）働き、最後には「魂つく」つまり「成功者・英雄」（ずく者）になったという話である。

これに照らしてみると、私には、「ずく」という方言の奥底には、物ぐさ太郎の人生のように、「世」（都）に出て成功することこそが好ましいとする、信州人が、いや日本人の多くが長年思い描いてきた人間・人生観が隠されているように思われてならない。

（こまつ かずひこ）

国際日本文化研究センター名誉教授